

令和 2 年 7 月 8 日現在

機関番号：23501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13138

研究課題名（和文）戦間期ヨーロッパにおける日本の性文化の受容について

研究課題名（英文）The Reception of Japanese Sex Culture in Interwar Europe

研究代表者

加藤 めぐみ (Kato, Megumi)

都留文科大学・文学部・教授

研究者番号：70717818

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：戦間期ヨーロッパにおける日本の性文化の受容を明らかにする本研究の鍵として、オーストリアの人類学者のフリードリッヒ・クラウスと日本人の性文化研究者の佐藤民雄（紅霞）との交流の実態の調査を進めた。来日経験のないKraussが『日本人の性生活（Japanisches Geschlechtsleben）』（1931）の全二巻を執筆した際の資料、佐藤との交流の記録を求めて、ウィーン、カリフォルニア、東京などでリサーチを実施したが、性文化研究に関する資料が残されていないということが判明した。文書の不在から、あらためて戦間期の日独境において、性文化研究が検閲、焚書の対象であったことが確認された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

19世紀に西洋にもたらされた日本の浮世絵・春画がジャポニズムを生んだこと、また20世紀後半から21世紀の現在、アニメなどを通して日本の性文化が広く世界で受容されていることはよく知られている。しかし20世紀の戦間期のオーストリアで日本の性文化研究の大著が記され、その研究に日本の市井の研究者が貢献したことはほとんど知られていない。そこで本研究は、日独のセクソロジストの交流の軌跡をたどることで、歴史の空白期ともいえる「戦間期のヨーロッパにおける日本の性文化の受容のあり方」を詳らかにし、19世紀から21世紀に繋がる歴史のうねりを捉えることに学術的・社会的意義があるとして試みられた。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to reveal how Japanese sex culture was received in interwar Europe. It started with the project to find out the way that international collaborative publication of 2 volumes on Japanese sex life (Japanisches Geschlechtsleben) in Leipzig in 1931 was realized by an Austrian anthropologist, Friedrich Krauss, and a Japanese sexologist, Satow Tamio (Kouka). Their relationship was expected to unwind the hidden network of the sexologists between Japan and the West. But neither at library of Vienna University which Krauss worked for nor in Krauss collections at UCLA library has possessed any primary materials on Japanese sex culture or records of their correspondence. The absence of materials has shown the reality of censorship, suppression and book burning of the sex-related studies in interwar Europe and Japan.

研究分野：比較文化

キーワード：性文化 オーストリア 日本 フリートリッヒ・クラウス 佐藤民雄 検閲 戦間期

1. 研究開始当初の背景

- (1) 明治の開国以降、浮世絵などの日本文化が、欧米に大量に輸出され「ジャポニスム」という文化現象を生み、その影響が美術、工芸、文学、舞台芸術に広く及んでいることを示す研究はすでに国内外で進んでいる。特に2013年末にロンドンの大英博物館で行われた「春画展」に結実したロンドン大学東洋アフリカ研究学院(通称SOAS)を拠点とする「春画」研究は、日本国内でもあまり研究が進んでいない浮世絵のなかの「春画」の存在、その芸術性を示し、そこに表象された「日本の性文化の豊かさ」は世界の注目を集めた。(Clark)
- (2) フーコーが『性の歴史 知への意志』(新潮社、1986)でヴィクトリア朝的、キリスト教的な性道徳が支配的な時代に、抑圧されていたはずの「性をめぐる言説」が最も盛んに流通したことを示して以降「性科学」研究が大きく前進した。フーコー自身、西欧の「性科学」を、日本を含むアジア圏の「性愛の術」と対置して論じているが、19世紀末から20世紀当時の双方の関係性については十分に検証されているとは言えない。
- (3) 本研究は(2)の独英の「性科学」の系譜(クラフトエビングから、H.エリス、フロイト、M.ヒルシュフェルト、F.クラウスに連なる性をめぐる言説)のなかに(1)の「春画」の海外流出とともに欧州に渡った「日本の性文化」の関連資料の影響を見出そうというものである。

2. 研究の目的

- (1) 戦間期のヨーロッパ、特に性科学(Sexology / Sexual Science)の中心であった独英において、日本の文化、なかでも「日本の性文化」がどのように受容されたかを明らかにする。
- (2) 明治の開国後、海外に流出した「浮世絵/春画」は、芸術の世界で「ジャポニスム」を生んだが、そこに描かれた「日本のセクシュアリティのあり方」はヨーロッパの性科学、民俗学にいかなる影響を及ぼしただろうか。異国趣味やオリエンタリズムにとどまらず、彼らがキリスト教文化圏の閉塞感を打破する力、性のエネルギーの価値を「日本の性文化」に見出していた可能性を探る。
- (3) 戦間期ヨーロッパでの日本の美術・文化の受容とジャポニスム、性科学をめぐりより広いコンテクストを探っていく。

3. 研究の方法

- (1) 本研究では、まずヨーロッパと日本との結節点に存在したと思われるフロイトの友人、ウィーン大学の民俗学者フリートリッヒ・クラウス(Friedrich S. Krauss, 1859-1938)の研究と日本人セクソロジスト佐藤民雄(紅霞)との関係に着目した。
- (2) クラウスは自身が編纂した民俗学研究誌 *Anthropophyteia*(1904-1913)のなかで日本人の性文化についての研究、さらに1931年に *Anthropophyteia* の補遺の第一巻として『日本人の性生活』(安藤一郎訳、青土社、2000)を出版した。そして *Anthropophyteia* 補遺の第二巻として佐藤民雄が日本語で記した「日本の性文化」についての研究所の翻訳をした。さらにクラウスはその後、「日本で出版された日本の性文化に関する研究書を多数翻訳し、*Anthropophyteia* 補巻シリーズとして出版する」という一大プロジェクトを計画していたことが記録されている。しかしその計画が佐藤民雄による『世界性欲学事典』一冊の翻訳の出版にとどまり、頓挫してしまう。その背景に1933年の「ナチスドイツによる焚書」という時代の影が大きく作用したことが推察される。
- (3) クラウスは、日本を一度も訪れたことはなかったが、手元にある大量の日本の性文化についての資料に基づき『日本の性生活』を執筆したとしている。果たしてそれらの資料はどういう経路でウィーンに渡ったのか。佐藤民雄とはどのようにして知り合い、交流を重ねたのか。「クラウス 佐藤民雄」を軸にして、戦間期の日独(奥)の研究者ネットワーク(交友関係)を探っていく研究の起点とすることとした。
- (4) そういった「日本の性文化」に関する資料の収集のため、クラウスが研究拠点にしていたウィーン大学図書館はじめ英独伊の図書館、さらにクラウスの研究の一次資料が保管されているカリフォルニア大学ロサンゼルス校図書館で調査を行った。

4. 研究成果

本研究において、クラウス関連で収集した資料のうち、図書館に保管されている文書で、印刷物になる以前の一次資料(主にUCLA図書館のKrauss Collectionsで集めた資料、論文の下書きやメモ、写真や書簡など)のうち、性文化、性科学に関する一次資料は見事に抹消されていた。検閲を逃れ、図書館に保管されていたのは、スラブ民族関連の風物、生活慣習、宗教儀式、衣装、風景、人物の写真、学会参加などに関連した書簡などのみだった。そこで本報告では、クラウスと佐藤民雄の出版物の形で残された著作物、関連した二次資料から得た研究の成果を整理し、今後のさらなる研究のための礎としたい。

(1) フリードリヒ・ザロモ・クラウスについて

クラウスは 1859 年スラヴォンスカポジェガのユダヤ系の商人の家庭に生まれた。1877 年から 1881 年ウィーン大学で古典文献学と歴史学を専攻したのち、在野の学者として性科学、民族誌、スラヴ学の研究に勤しむと同時に、小説家や翻訳家としても活動。フロイトやルドルフ皇太子とも交流した学識者で、1916 年に教授資格を授与されるも、生涯一度も大学教授職に就くことはなかった。ヒトラーによるオーストリア併合の二ヶ月後の 1938 年ウィーンにて逝去（78 歳）。

世紀転換期において、クラウスによる性科学研究は受け入れがたいものであり、彼の「猥褻な」著作の出版はしばしば裁判沙汰となった。1968 年運動以降、性科学研究を寛容に受容するようになり、やっと彼の研究の価値が評価されるようになった。

(2) クラウスの『日本人の性生活』

クラウスは『日本人の性生活』と題する本を 1907 年、1911 年、1931 年に出版。没後の 1965 年にも改訂版が出版され、ヨーロッパにおける日本の性文化研究の第一人者となった。彼はドイツ語圏のスラブ文化を研究していたが、森の妖精、魔女、幽霊など神秘的な世界を語る実母や 1879 年シュトゥットガルトの雑誌『外国』に掲載された「日本の植物誌」からの影響で日本とスラブの文化や祭儀に共通する性衝動の現れに興味を惹かれるようになる。さらにウィーン在住の日本人外交官の妻から情報を得て執筆されたクドリアフスキーによる日本に関する書物で日本研究に駆り立てられる。

(3) アントロポフィテア—民俗学的研究および性道德の発展史研究の年鑑

1904 年から 1913 年のあいだに年間一冊のペースで発行されたこの本は、学識者のみを購買層として想定していたため、一般には流通していなかった。一冊現在でいう 258 ユーロで、読者はごくわずかな裕福な者に限られていた。クラウスは『女性美の国の偵察』『女性の優美』と題したヌード写真集販売で学術書販売の資金を得ていた。

クラウスの『日本人の性生活』初版は「性科学」という概念をドイツ語に導入した性科学者イワン・ブロッホに捧げられている。（ブロッホは『吉原 日本の花街』のドイツ語訳を出版。）アントロポフィテアには民俗学者、性科学者、文化史家が名を連ねていたが、皆、民俗学博物館の研究者で大学教授ではなかったことから、当時いかに性科学が軽んじられていたかがわかる。またクラウスの出版物は度々検閲にあい 1913 年ベルリンにおいて、クラウスによるすべての補巻および『日本人の性生活』は「廃棄処分」に処すとの判決が下った。1938 年には「禁書」の扱いを受けることになる。日本では本書の翻訳が 5 回出版され日本の性科学の歴史に確固たる位置を占めている。

(4) 佐藤民雄

『日本人の性生活』の第二巻『日本民族の性生活の論考と調査 民俗学的研究』は佐藤の筆によるが、原稿はヘルマン・イームによって編纂されている。全 654 ページ、図版も 164 枚収録されたこの本は視覚にも訴えかける。クラウスが、当時のヨーロッパの言語でアクセス可能な日本の風俗や慣習、慣習法や宗教にまつわる性の資料や言説をまとめたのに対し、佐藤の方はそれまでヨーロッパでは知られていない日本の性のフォークロア〔民間伝承〕についての情報が満載である。生き生きとした表現に富んでいるが、学術的な性質は薄い。

佐藤民雄の人生、クラウスと交友関係については、彼の遺した著作以外から情報はほとんどない。伝記が個人的な出版物として書かれた記録はあるが、現在は確認できない。1891 年に生まれ、1957 年に交通事故で逝去している。彼は独、英、仏語に通じ、市井の研究者、実用書作家、翻訳家、そして酒類輸入業者として活動し、性やアルコール飲料にまつわる作品を多数発表している。驚くべきは、当時、ヨーロッパと同様日本でも性科学についての研究がまったく一般的ではない時代に、佐藤が日本文化における性の様々な表象に飽くことなき学問的関心を示したことである。佐藤は「紅霞」の筆名でも執筆活動をしていた。

(5) エログロナンセンス文化における佐藤民雄と梅原北明

佐藤は『デカメロン』の翻訳者として知られる梅原北明（1901 年～1946 年）をはじめ、昭和初期のエログロナンセンス文化を代表する人々と交友関係にあった。性科学に関する市井の研究者たちは当時互いに知己を結び、共同出資で、エログロや性に関連する叢書や雑誌を発行していた。このような雑誌は、大正デモクラシーの文化最盛期にあたる 1925 年 11 月から 1933 年 1 月の七年間のあいだに出版されたが、1931 年の日中開戦以降、自由な（リベラル）雰囲気は徐々に軍国主義的な空気に回収されていき、エログロナンセンス文化は急速な終焉を迎えることとなった。佐藤とクラウスの交友および友情関係はこのような時代背景で育まれた。

梅原北明は早大卒業後、新聞社の記者をしながら、ボッカチオ『デカメロン』の翻訳に取り組んだ。『デカメロン』は 1910 年、1923 年にも翻訳されていたが、1925 年の北明の全二巻は決定版となった。同年、梅原はアルベルト・レイス・ウィリアムの『露西亞大革命』（1921 年）の翻訳を発表。当時の知識人たちの性愛、社会主義への関心の高さを証明した。北明が 1925 年に編集、発行した雑誌『文芸市場』は左翼的雑誌として構想されたが、翌年「風俗雑

誌」となり、1927年以降は右翼の雑誌へと変転を遂げた。北明の手による雑誌には『変態資料』『グロテスク』『奇書』『カーマシャストラ』『談奇党』『変態黄表紙』がある。『文芸市場』『変態資料』には、佐藤が何度も寄稿している。北明は性に関する出版物が原因で、何度も罰金刑、禁固刑に処されたが、金銭的利益より、出版活動そのものに憑りつかれていた。戦時中は軍隊の翻訳を余儀なくされ、終戦直後の1946年4月、45歳の若さでチフスのため逝去した。

(6)日本における佐藤紅霞の創作活動

日本で佐藤は佐藤紅霞という筆名で活動し、『蚤の自叙傳』の翻訳者として知られていた。性の文化史を研究する団体「文芸資料研究会」から400部発行された。佐藤はまた温故書店から『川柳変態性慾志』を発行した。川柳は諧謔に富む形式で、卑猥でエロティックな内容を伴う。江戸時代、性愛にまつわる印刷物の出版は禁止されていたが、実際に罰せられることはなかったため、後の性科学者にとって江戸時代は、性愛にまつわる印刷物文化の黄金時代だった。明治維新後に成立した新政府は江戸時代を否定的に、反動的な時代との烙印を押した。

1928年、佐藤はフックスの三巻本『変態風俗史』の第一巻と翻訳を出版した。タイトルの「変態」から、この作品は性愛の歴史であることが一目でわかる。フックスは、マルクス主義的文化学者で、歴史家、小説家、芸術品収集家、そしてKPD〔ドイツ共産党〕設立メンバーでもあった。この書を佐藤はドイツ語の原典から翻訳した。厳しい検閲や、日本の軍国主義の高まりの影響で、フックスの残りの二巻の翻訳書の発行はかなわなかった。

1929年3月『世界性慾学辞典』が出版される。二種類の序文がおかれ、1928年10月10日と記された第一の序文は、オーストリアのウィーン大学教授・フリードリヒ・S・クラウス、第二の序文は名古屋医科大学教授で、日本人の性心理学者・杉田直樹医学博士(1887年～1949年)が記している。『世界性慾学辞典』の購入者や読者にとってもこのウィーン大学教授との名称の方が好印象を与えたに違いない。ドイツ語で書かれた序文はそのまま印刷されている。しかしそこには解読不可能な言葉が並んでいる。クラウスは佐藤に「最も尊敬する私の仕事仲間閣下!」との称号を与えて、佐藤に敬意を表している。序文冒頭でクラウスは、日本にも本能〔学〕研究者が存在すること、そして佐藤が『アントロポフィテイア』の書籍の数々を徹底的に読み込んでいたことを高く評価している。クラウスよれば『世界性慾学辞典』は「本能〔学〕研究についての日本語によるはじめての教科書」であるという。続いてクラウスは、日本人にたいする敬意を評している。なぜならば日本人は、「神道において本能を、万有の創造者である最も高貴なる神々、すなわちイザナギとイザナミとして創り出し、本能を自然の力の宗教にまで高めることをやってのけた」唯一の民族だというのである。クラウスはこうした〔日本の伝承における〕事実を知っていたからこそ、1928年5月に佐藤が「セックスについて」やそれに関連する猥褻な作品が原因で告訴され、幾度も裁判にかけられたことを知り大変なショックを受けたに違いない。このことは、クラウスにとって「日本精神の急激な転換」であり「間違いなく古事記の禁書や神道の根絶に通じるであろう、大それた行為」を意味していた。このようにヨーロッパから新たに受け継がれた性に対する弾圧は、クラウスにとってみれば「あなたがたの民族の発展を脅かす法の危険性、まさに民族の白痴化」に通じるものであった。こうした状況に対抗して、「自然科学を自由に思考するあらゆる日本の男性や女性、そしてとりわけ神道の信奉者たちは積極的な抵抗のために…団結しなくてはならない。偽善の日々の営みや嘘や偽りを破壊するために、民族に敵対する汚染との戦いにおいて、とりわけ民俗学者たちが指揮をとらなければならない」。したがってクラウスは、この序文を、性愛を題材としたあらゆる作品が被る検閲に対する激しい訴えとして用いたのであり、日本人に対しても繁殖力〔想像力〕豊かな祭りに重きを置き、猥褻の概念を知らない彼らの伝統を思い出すことを要求しているのだ。

1929年6月、文芸資料研究会はふたたび佐藤の新たな辞典である『日本性的風俗辞典』を出版した。序文において佐藤は、前年の1928年にこの辞典を『アントロポフィテイア』のためにドイツ語、英語、フランス語で執筆したが、仲間や出版社の多くから日本語に翻訳するように要請されたと記している。佐藤は、日本の性の風俗や慣習が海外においてまったく知られていないという危機感からこの本を出版したと考えられる。佐藤はラフカディオ・ハーンとハヴロック・エリスが日本におけるキス〔接吻〕の意味合いにたいして完全に間違っただイメージを持っていたことにショックを受けたとされる。

人間の性生活に対する強い関心が、ウィーンの性科学者でフリードリヒ・S・クラウスと日本の性科学者の佐藤民雄を結びつけたと言えるが、20世紀初頭の「国際的」なプロジェクトは日本の軍事政権、ナチス・ドイツによる思想統制、検閲によってスタート地点で終止符を打たれることになった。今回の研究においては日本国内におけるリサーチに十分な時間を割けなかったため、今後はより広く佐藤民雄関連の研究を深めていきたい。また「戦間期ヨーロッパにおける日本の性文化の受容について」の本研究で得られた知見が、日本生まれのイギリス人作家カズオ・イシグロが日本を舞台に描いた初期作品の分析に有用であることがわかった。その第一歩として、イシグロの日本の幽霊への関心にヨーロッパから見た日本の性文化への幻想をよみとることができた。

< 引用文献 >

- Clark, Timothy, *Shunga: Sex and Pleasure in Japanese Art*. London: The BMP, 2013.
- Sepp LINHART, "Friedrich S.Krauss and Tamio Satow: Ein bibliobiografischer Versuch zu einer internationalen Freundschaft und zur Geschichte der Sexual-forschung in Osterreich und Japan" *Die Republik Osterreich Und Japan Wahrend Der Zwischenkriegszeit 1918-1938 (1945)* Beitrage Zur Japanlogie Band 42 (Wien 2013) [セップ・リンハルト「フリードリヒ・S・クラウスと佐藤民雄——オーストリアと日本における国際的交友関係および性科学の歴史についての書誌学考察」田邊恵子訳]
- 大尾侑子「戦前昭和の「国家」を超えた「市井の学」——性民俗学と佐藤紅霞」(日本近代分学会 2018 年度春季大会 2018)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 加藤めぐみ
2. 発表標題 橘小夢《水麿》の謎に迫る - 日本文化とヨーロッパ世紀末芸術とのはざままで -
3. 学会等名 日本比較文化学会2016
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Megumi Kato
2. 発表標題 Tracing the Ghost of the Past: Paintings of Maruyama Okyo and A Pale View of Hills
3. 学会等名 Twenty-First Century Perspectives on Kazuo Ishiguro: An International Celebration (国際学会)
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 田尻芳樹、秦邦生、莊中孝之、麻生えりか、加藤めぐみ、菅野素子、三村尚央、レベッカ・ウォルコ ウィッツ、マイケル・サレイ、レベッカ・スター	4. 発行年 2020年
2. 出版社 水声社	5. 総ページ数 320
3. 書名 イシグロと日本	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----